

浦上キリシタン流配 150年(2018~23)
ニュースレター

山口・萩教会殉教祭 講演会 (2017.11.11/土)

～ 東洋の奇跡／日本の信徒発見から浦上四番崩れへ ～

▼乙女峠まつりから始まる「浦上キリシタン流配150年(2018～23)」の活動を前に、昨秋11月11日萩教会でイベント「萩流配者の顕彰ミサと講演会」が開催されました。その時の川村信三神父(イエズス会・上智大学教授)の講演会『東洋の奇跡／日本の信徒発見から浦上四番崩れへ』の概要です。



▼1868年隠れキリシタン発見のニュースを聞き、1月8日当時の教皇ピオ9世が「東洋の奇跡」が起こったと高らかに宣言しました。私がここで話したいことは、何故250年間も神父がいなくて、全くローマと切り離された教会が、400年前と同じカトリック信仰に戻れたかということです。潜伏キリシタン共同体は、何故カトリック信仰を捨て去らなかったのでしょうか。

長崎教会群の世界遺産認定の話で、2年前ユネスコは一度止めました。その理由の一つは、「潜伏キリシタンは250年間何故隠れることが出来たか、何故教会に戻って来られたか、その歴史を説明して欲しい」ということでした。それをポイントに今日は話してみたいと思います。「東洋の奇跡」は次の「三つのキーワード」が揃って実現したと、私は説明しています。

1. 「コンフラリア(信徒組織)」が有った。これで**信仰**を守った。
2. 「バスチャンの予言」、これによって隠れキリシタンは励まされ、**希望**を持った。
3. 「コンチリサンのりやく」、倒れても起き上がり赦しを乞う、**愛**(愛情)ですね。

1. 「コンフラリア(信徒組織)」について

信徒だけの組織で、ミゼリコルディア(慈悲の意)の組、もともと慈善事業や社会福祉などをやる団体。イタリアで13世紀頃すぐく流行して、教会に行くかたわら作ったサークル活動みたいな組織です。司祭の指導も受けない。ヨーロッパで沢山出来ました。16世紀ローマだけで150団体程も。それが日本に伝えられ、日本で一番初めに大分の病院で。ザビエル(1549年～)の時代から有りました。伴天連追放令(1587年)で、司祭は一度表舞台から消えるその時全国に200箇所位有ったのです。これが有ったから長崎・五島・外海の信徒は自分たちで組

織を切り盛り出来た。これが非常に重要な点です。もしこのコンフラリアが無かったら多分信徒は四散していたことでしょう。

2. 「バスチャンの予言」について

1657年長崎の隣の大村の信徒発覚事件で大勢逮捕されたり殉教されました。その中の一人バスチャンは3年3ヶ月長崎の牢屋に閉じ込められた。迫害があった時、「必ずこの教会は復活する」と言う希望を語りました。バスチャンの予言です。有名な言葉「7代経ったら黒船が現われるから、その乗っている人を待ちなさい」…7代もたつと信仰を守るのが難しくなるけど、黒船が来るから待ちなさいと。この時バスチャンは口伝^{くでん}で代々伝えなさいと言い残した。バスチャンは「黒船で来るコンフェッソーロ（聴罪師）を待ちなさい」と言い、それを見分ける次の3つの質問を用意したのです。①独身か、②ローマ教皇の名を知っているか、③聖母マリアを崇敬しているか。その伝承が長崎・五島・外海に残っていました。その残っていたことに大きな鍵が有ります。コンフェッソーロに会えたら「大声でキリシタンの歌が歌える」「ゆるしの秘跡も週に一回は出来る」…皆さん嫌がりますよね（笑）。7代経ったら…丁度信徒発見(1865年)の頃です。

3. 「コンチリサンのりやく」について

1587年の伴天連追放令後、神父は公にいなくなりました。年に一度必ず教会で司祭にコンヒサン（罪の告白）をしないといけない。皆困った。その時宣教師たちが考えたことは、コンチリサン（赦しの秘跡）は“心からの痛悔”を徹底的にしたら“口での告白”は後で良い、いずれ司祭が現われた時大丈夫としました。でもそれはローマでは認められない。1593年ローマに行く宣教師が質問状を作りました。そのリストの最後に、「コンヒサンは司祭がいない場合後でも良いか？」も有った。向こうの神学者に聞き、「迫害が常態化している緊急の場合、徹底的に心からの痛悔をすれば、後で良い」と言われました。それを聞き、日本に帰り「お墨付きがもらえたよ」と。イエズス会は直ぐ印刷した。この救済措置は大きかったです。コンチリサンのりやくを皆書き写して持っています。大浦天主堂その他に現在写本が幾つか残っています。殆ど同じ。赦しの秘跡を保留しているお墨付きで生きてきました。それがバスチャンの予言と繋がります。「コンフェッソーロ（聴罪師）が帰ってきたら、あなた方は思う存分ゆるしの秘跡を聞いてもらえますよ」、これが彼らの救いそして希望でした。皆さんは面倒だなと思うかもしれないが、本当に救いを求めた人にとって、このしるしがどれ程大きな意味を持つか。

そして七代経って、そろそろ？と皆が思っている頃に黒船が来ました。大浦の南蛮寺に行って聞いたのが、髭^{ひげ}を生やした異人さん。質問します。「独身ですか？」『はい』『おかしらの名は？』『聖母マリアを崇敬しますか？御像は何処ですか？』で、『こちらへどうぞ…』と連れて行かれたのが復活のマリア像前。話が繋がりましたね。250年間の信仰の希望であるマリア像と会えて、彼らは多分大喜びだったはず。「これだ！」と。で「皆出てこい」と言って、ぞろぞろ一万人位出てきました。1865～68年頃の話です。それに対して江戸幕府のキリシタン禁制を継承しようとしていた明治政府は、出てきた方たちを尋問します。埋葬の話が出て、キリシタンではないかと言って捕えて流したのが四番崩れでした。

▼以上「コンフラリア（信徒組織）」「バスチャンの予言」「コンチリサンのりやく」の三つが一つに結合した結果として、皆が250年間（キリシタンとして）生き続けた。ここで一番重要なのが、他で言うと理解されませんが、（これは）「秘跡（サクラメント）」です。400年前に先祖たちが（洗礼を）受けて幸せだったそのサクラメントを、皆は記憶して残そうとしました。その記憶が人々を250年間生かし続けたのです。私は「秘跡の記憶」と呼んでいます。この秘

跡、かたち、教会と言う目に見えるしるし、秘跡と言うしるしが有ったからこそ、カトリックの信仰が250年経っても残り続けることができたキーポイントです。

もし400年前のキリシタン時代がプロテスタント教会だったら、250年後のこの状態は無かったでしょう。秘跡です、イエス・キリストの目に見えるしるし、このしるしを是認する、この記憶の方法が秘跡を可能にした。これが私の解釈です。今年(2017年)はルターの宗教改革から500年です。ルターは言った、「私と神の間に客観的な(心の中に)信仰が有れば、それでOKです」と。でもカトリック教会にはしるしが無いといけない。教会というものが無いと。それ(しるしが有ってこそ)で東洋の奇跡が実現したと思っています。



▼カトリックの神学者・岩下壮一神父(1889～1940)の話です。1920年代彼はアイルランドで神学生でした。その時、少し年配の同僚は皆、プロテスタントの改宗者で、カトリックの司祭になりたいとやって来ていました。岩下神父は、何故こんなに大勢改宗したのだらうと首を傾げた。彼らには共通の体験が有ったのです。第一次世界大戦に従軍した時、塹壕

の中で何ヵ月間も死の恐怖にさらされる体験をしていました。その時、一番何が慰めになったか、何が彼らを勇気づけてくれたかと言うと、そこに(司祭が)回って来て聖体を配り、赦しの秘跡をして、赦しの言葉を言う司祭(の存在)が一番強く慰めになった。「あっ、これだ!」と思った。どんなに良い説教も、死の恐怖に直面した人には何の意味も無かった。意味が有ったのは、赦しの秘跡と聖体だった。これです、カトリックが良いのは。私たちは普通に(軽く)赦しの秘跡とか聖体とか言いますが、究極の場面でこれ程力になるものは無いと思います。それが隠れキリシタン250年の歴史の中で記憶として残っていて、残す仕組みをちゃんと持っていて、そして(カトリックに)戻って来られた。秘跡の記憶です。だから、私たちは(今も)カトリック教会に留まっておられるのです。

▼福山教会殉教祭／9月30日(日)：講演会と福山市内巡礼

午前中／古巣 馨神父(長崎純心大学教授)に聞く、浦上四番崩れのお話。
昼食後、市内4か所の流配所を徒歩巡礼の予定。

▼「四番崩れ解説パネル」教会展示にご参加を！

津和野、山口、萩で実施。2月には岡山、玉野で開催。今後も教区内の教会に順次巡回展示出来たらと願っています。希望の教会は肥塚神父まで。

▼「浦上キリシタン流配／朗読劇」制作中！

朗読で学ぶ浦上キリシタンの流配のお話です。各地での上演を目指しています。

「浦上キリシタン流配150年」を学ぶ為、随時発行します

《発行：広島教区 殉教地・巡礼地ネットワーク 事務局》